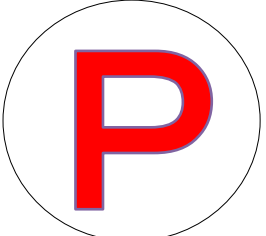



# 令和3年度PDCAサイクル(特定抗菌薬使用届け出率)



P



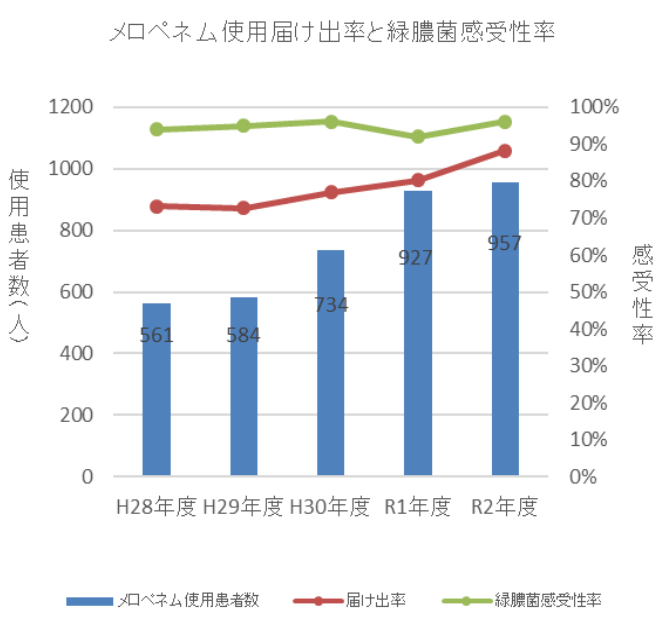
2016年、耐性菌出現を阻止するために世界的な取り組みとして薬剤耐性(AMR)対策が公表され、対策の重要項目として抗菌薬の適正使用推進に関する取り組みが必要とされています。

取り組みの一つとして特定抗菌薬の使用届け出制度が求められ、平成24年から実践している。届け出制は院内の抗菌薬の適正使用を監視し、使用抑制につながるとされている。

特定抗菌薬は、抗MRSA薬、広域抗菌薬(カルバペネム系、タゾピペ)で、届け出率は100%を目標としている。

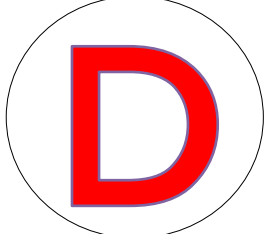
使用届け出率は(届出数/使用患者数)×100で算出する

メロペネムは使用患者数が最も多く、緑膿菌の影響を受けやすい




メロペネム使用届け出率と緑膿菌感受性率

年度	メロペネム使用患者数	届け出率	緑膿菌感受性率
H28年度	561	73%	94%
H29年度	584	73%	95%
H30年度	734	77%	96%
R1年度	927	80%	92%
R2年度	957	88%	96%

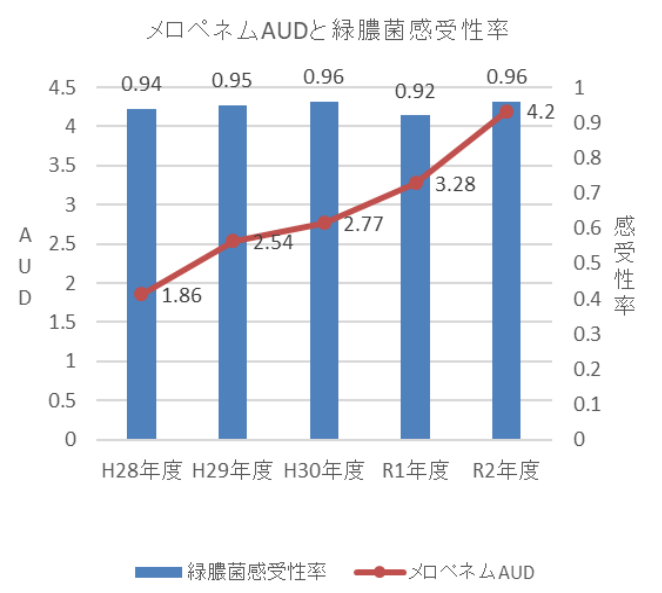


D



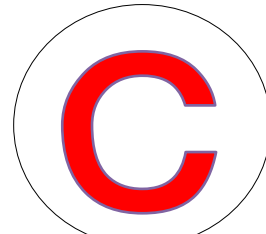
○以下の対策を継続して実践

- 定期的なモニタリング
  - 1回/週、特定抗菌薬の届け出率の把握  
(診療科医師への周知として、1回/月の医局幹事会で報告している)
  - 2回/年、アンチバイオグラムによる薬剤感受性の把握とAUDの評価AUD: (WHOが推奨している抗菌薬使用量の評価指標抗菌薬使用量の評価指標)
- 血液培養陽性者の抗菌薬使用に関する適宜助言
  - 抗菌薬の種類や量、期間
  - 長期抗菌薬使用(14日以上)
- 病棟薬剤師の取り組み
  - 週1回、病棟ごとに届け出リストを把握し、未届け医師への声かけ




メロペネムAUDと緑膿菌感受性率

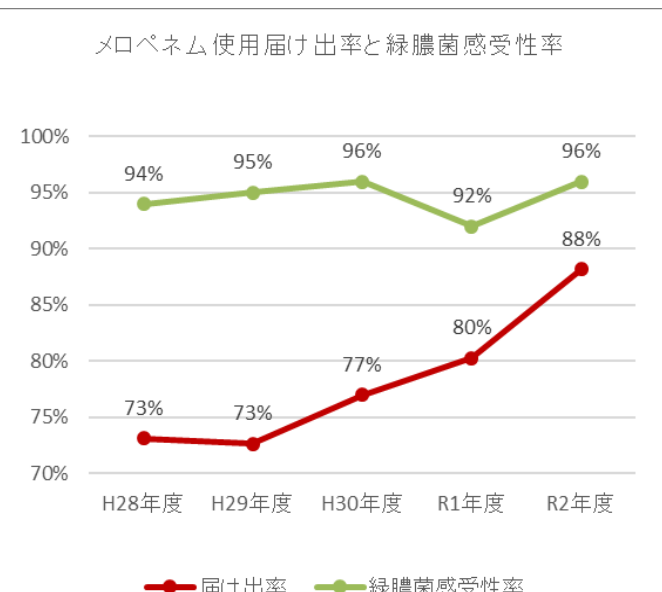
年度	緑膿菌感受性率	メロペネムAUD
H28年度	0.94	1.86
H29年度	0.95	2.54
H30年度	0.96	2.77
R1年度	0.92	3.28
R2年度	0.96	4.2



C

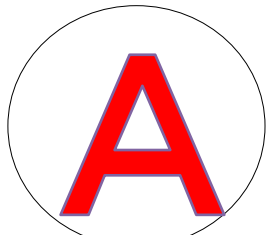


- メロペネムの使用患者数は増加しているが感受性は低下しておらず、抗菌薬は適正に使用できている状況と考える。
  - 特定抗菌薬の周知の方法として、医局幹事会だけではなく、院内ポータルを利用して情報を発信し、診療科医師の意識の強化を図る
- 血液培養陽性者の抗菌薬使用に関する適宜助言
  - 抗菌薬の種類や量、期間
  - 長期抗菌薬使用(14日以上)
- 病棟薬剤師の取り組み
  - 特殊抗菌薬届け出率は上がってきたが、100%をめざし、未提出医師への声かけを継続して行っている。
- 院内採用抗菌薬の整備としてカルバペネム系薬剤を2剤に減らすことができた。




メロペネム使用届け出率と緑膿菌感受性率

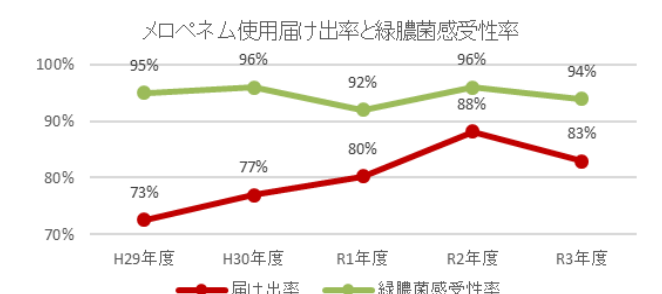
年度	届け出率	緑膿菌感受性率
H28年度	73%	94%
H29年度	73%	95%
H30年度	77%	96%
R1年度	80%	92%
R2年度	88%	96%



A

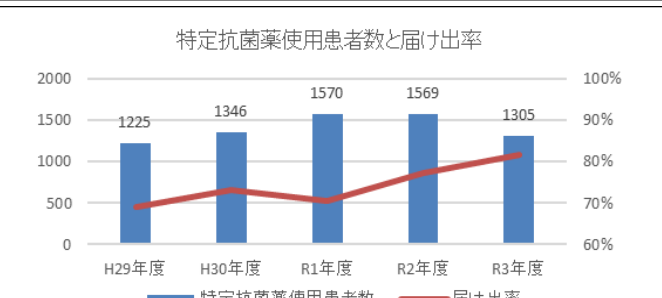


- 定期的なモニタリング
  - 緑膿菌感受性は、推定94%であり、高い数値を維持している。極端な低下はみられないため、適正な使用と判断する。
  - 特定抗菌薬の周知の方法として、12月より院内ポータルを利用して情報を発信した。意識の強化を図れ届け出率は上昇しているが、長期的に評価していきたい。
- 血液培養陽性者の抗菌薬使用に関する適宜助言
  - 相談件数が増加しており、各診療科の意識は高いと考える。来年度は、相談のシステムが変更となる可能性があるため、周知を徹底していきたい。
- 病棟薬剤師の取り組み
  - 全体的に特殊抗菌薬届け出率は上がっているが、メロペネムに関しては低下しているため、対策を継続する。



メロペネム使用届け出率と緑膿菌感受性率

年度	届け出率	緑膿菌感受性率
H29年度	73%	95%
H30年度	77%	96%
R1年度	80%	92%
R2年度	88%	96%
R3年度	83%	94%



特定抗菌薬使用患者数と届け出率

年度	特定抗菌薬使用患者数	届け出率
H29年度	1225	73%
H30年度	1346	77%
R1年度	1570	80%
R2年度	1569	88%
R3年度	1305	83%